

天草方言で読む「<sup>こんじきやしや</sup>金色夜叉」 尾崎 紅葉 鶴田 功 〈意識〉

ここは箕輪の庭の奥座敷、十畳と八畳を打ち抜いて三十人余りの若っか男女がカルタ会に夢中になっとった。

そん中に一人、夜会結びに藤紫のリボンを付けて小豆ねずみの縮緬の羽織を着た一人の娘の容色が際だっとった。涼しげな目を見張って、人々が騒ぐ様子ば面白そうに微笑んで見とったが、その水際だった美しさは、勝負も終わらんうちに、宮という名前も覚えられてしまうほどじゃった。

カルタ会が佳境に入ったとき、綱曳き人力車で駆けつけた紳士がある。二十六・七、なかなかの好男子で、高い鼻に金縁のめがねを挟み、座敷に入って鷹揚にあたりを見回した様子は、座中輝くばかりじゃった。

一座の目は一時この紳士に集まった。紳士の左の薬指には、天上の最も明らかな星は我が手にありと言わんばかりに、大きかダイヤモンドを飾った金の指輪がはめられとる。「あれが三百円のダイヤモンド」「素晴らしいわネ」という感嘆の声がおんなどもから起こった。「いやな奴だ」というつぶやきも、それと混じって二・三の学生の間に取り交わされた。

紳士は富山唯継といって、富山銀行の頭取で、且つ市会議員の肩書きを持つ富山重平の跡取りじゃた。

勝負はまた再開されて、富山は偶然にも宮の組になって、相手方と争うたばって、ダイヤモンドの鼻を砕いてやろうという若者共を相手にまわしたため、散々にやっつけられ、髪のはらはらになり、羽織の紐はちぎれて、ほうほうの態で奥の一間に逃げ込むで、箕輪の主人に勝負の始末を話したが、その話の中で、例の夜会巻きの女の噂が出た。

「父は元、農商務省に勤めておりましたが、只今では地所や家作などで暮らしているようなことです。小金もあるような話で、島沢隆三と申して、ごく手堅く隣町で暮らしております」紳士は「ああ、しれたもんじゃね」と言いながら、例のダイヤモンドを光らせながら顎をなでたが、「それでもよか、ばって嫁に呉るっどか、跡取りじゃなかね」「詳しくことは存じませんばって、一つ、当たってみやっしゅう」ということになった。

富山がここに来たとは、実はこういう会に出て、嫁を物色しようという下心じゃった。一昨年英国から帰朝したが、降るほどの縁談はあったっちゃ器量好みの彼には、どれも意にかなわんでいたところ、たまたまお宮を見るに至って、彼の心は動いたのである。

カルタ会は十二時に終わった。例のお宮の送り手は数多かったばって、付き添ったのは唯一人で二十四・五の高等中学の制服をつけた学生である。

宮は鳩羽ねずみのお高祖頭巾を被って、毛織りのショールをまとい、学生は焦げ茶の外装を着ていたが、人目が無くなると、ぴったりと寄り添って歩き出した。

「宮さん、あんダイヤモンドの指輪をはめとった奴はどがんね、いやに気取った奴じゃっか」「そうねえ、ばって、みんながあのひとを目の敵にして乱暴するけん気の毒じゃった。隣り合とったけん私までひどいめにおうたとよ」

だけど学生は歩きながら、何度となく富山を罵倒した。木枯らしが激しく吹くので「ああ寒か」と男は言う。「あら、いやね、どうしたと」「寒くてたまらんから、その中へ一緒に入れ給え」といいざま、男は宮のショールの片端を奪って自分の肩にかぶせた。

「あら寛一さん、これじゃ切なくて歩けやしな、向こうから人が来よるよ」と、宮は足が前に出ないほど笑いこけたが、一体この二人は何者だろうか。

事情あって十年来、鴨沢に寄寓しているこの間寛一は、今年の夏、大学に入るのを待つて宮と結婚する相手の男だったのである。

寛一の父は、かつて戸主隆三に恩顧を加えたことがあり、隆三はその恩に報いようとして、父無き後の寛一を引き取って、現在まで彼を養育してきたのである。最初は単に恩人

の忘れ形見として、おろそかならず扱っていた程度だったが、寛一が高等中学に入り、学力が優秀であるあることが判ってからにゃ、もし学士の栄冠を頂けたら得難い婿になっどと決心するに至った。寛一も養子となって身代を譲られるのは男の恥辱てにゃ思うばて、美しか宮を妻にすることを思うと、すべてを忘れて学問に励んだ。

宮も、寛一を嫌いじゃ無かったが、自分の美貌に自信を持ち、鴨沢程度の資産を継いだり、数多い学士風情を夫に持つのは最高の理想じゃなかった。ち言うて、寛一と一緒にすることも楽しかろうとは思っばて、もっと大きな幸運も舞い込んで来そうな気もした。

宮は寛一の書齋で、彼の帰りを待ったが、夜の十時を過ぎててもまだ帰ってこん。向島の八百松で新年会が四時から開かれているはずである。時計を見るともう十一時に近い。珍しく寛一は酔っぱらって帰ってきた。

ついぞ酒など飲んだこともなか寛一が、真っ赤になって、玄関でゆらゆらしとるもんだけん、宮は女中と一緒にようよして書齋に運び込むだ。

布団の上に抱き下ろされた寛一は、いい気持ちになって「君に勧む、すべからく少年のときを惜しむべし」を微吟しながら、宮の顔をつくづくと打ち仰いだ。

「寛一さん、どうしてそがん酔ったと」「酔うとっど。僕は。ねえ宮さん、どもこも酔うとっど」「いやよ私は、そがん酔ってちゃ、普段嫌いなくせに、どいそがん飲んだと。誰に飲まされたと。葉山さんの荒尾さんだのがついていながら、ひどかね。こがん酔わせて。十時にはきっと帰るちゅうから私は待ったとに、もう十一時過ぎよ」

寛一が酔わされたちゅうとは、親友の荒尾より外は二人の仲を知るはずがなかとに、どい知れたとか、みんなが知って祝杯責めになったと、と説明した。

こうなれば、どがんしたっちゃ、立派に夫婦にならんば、いよいよ自分の男が立たん訳だ、とも言うて、お宮の手をぎゅっと握った。「私の心は決まるとるよ」「そうじゃろかい」「そうじゃろかて、それじゃあんまりよ」寛一は体を支えかねて、お宮の膝に倒れた。

「水をあげましょう。ね。あれ、また寝ちゃ…寛一さん、寛一さん」

この時ばかりは、宮はあらゆる望みも消え失せて、膝を通して伝わる男の暖かさのためにうっとりとしてしもた。深夜の一室にはただ二人だけ。いつしか甘露のごたる夢に酔うて、前後も判らんだった。

こがんことがあって間もなく、箕輪の内儀が鴨沢家にやってきた。三時間ばかり話し込んで帰っていったばって、寛一はちょうど不在じゃったけん、そんなことは知らんだった。

だけど、そん日から宮は食欲がなくなり、夜も目覚めがちになった。宮がめっきり物思いがちになったのが寛一には気掛かりになったばって、体も悪くはなか、何でもなかと弁解する宮に何か水臭さを感じじゃった。「世の中に二ついいことはなかとに、私は考えれば考えるしこ心細かとよ」というのに対し、寛一は「僕などは一つ大きな楽しみがあるので、世の中が愉快で愉快でたまらんだ。もしその楽しみを取り去ったら世の中は無かし、寛一というの無か。そがんじゃろう宮さん」と言うたが、宮は全身の血が凍るばかりの寒さで震えた。

その翌々日のことである。宮は寛一と顔を合わせるとが辛くなって、母と一緒に熱海に静養に出た。学校から帰った寛一は、主の隆三が一人留守番しとるのを不審に思うて聞けば、二人が熱海に四・五日出養生に行ったと隆三は答えたが、寛一にしてみれば、どい自分に黙って急に熱海に出掛けたっか、宮の心理が判らんだった。

翌日になって隆三は、お前の一身上のことについて相談があると申し出した。相談というのは宮と寛一の縁談を取り消して、宮を他家に嫁に出そうという意外な話じゃった。

だけど、寛一はどこまでも鴨沢家の跡取りであり、大学を出たら洋行もさSゅう、どこまでも寛一の将来は見てやろうという。

もとより、十五の年から厄介になった鴨沢家の小父に楯突くことは出来んばって、それ

でもあまりの理不尽さに、内心怒りながら、その嫁ぎ先を聞けば、富山家からの申込みだという。あのカルタ会で三百円のダイヤモンドをひけらかした男かと寛一は内心嘲ったが、事ここに至っては宮の所存が聞きたかった。隆三によれば、宮にも異存はないという。だからお前も承知してくれと言う。寛一はただ、「はい」と答えざるを得なかった。

熱海に来た宮は、さすがに心が痛んで鬱々として楽しまなかった。今日も母と梅林を散歩していたが、そこへ急ぎ足で駆けつけたのは富山じゃった。彼は宮の機嫌を取ろうと、色々話しかけたり、散歩に誘うが、宮の気持ちはそこまで進まない。無理に富山が勧めようとしているところに、またあわただしく靴の足音がして、七・八間彼方に歩みを止めた男がいる。高等中学の制服の上に焦げ茶の外套を着て、肩に古ぼけた皮の学校カバンを掛けた間寛一である。

母子の顔色はみるみる変わった。この場の空気を乱すまいとして、寛一も怒りをこらえ、母子も富山に再会を約して、寛一を伴って宿屋に帰った。

熱海ん海は、月光に照らされ限んなし広か。寄せては返す浪も春めいとるそりばって、浜辺ば宮と漫ろ歩きしよる貫一ん胸はそっどこっじゃなかった。

「堪ねしてな」ちゅう宮に「何も今更あやまらんちゃよか。今度んこたあ小父さん小母さんからでたっか、あんたが得心した上んこつか、そがしこ聞けばよかと」と言う貫一んことばに宮は返事しいきらんじゃった。

貫一は、遂にはるきゃーて、宮に操ば破った姦婦だちゅて決めつけた。

「俺ば出し抜いて、富山ば呼び寄せたとはどいか」ちゅて、問い詰めながらも貫一は何時じゃい、自分が宮に捨てられことに胸ん張り裂けんばかりになって、砂浜や思わずうっ倒れた。

びっくりして、抱き上ぎゅうてする宮ん手ば、彼は力無げに取って、

「ああ、宮さん、こがんで二人が一緒に居っても、今夜限りばい、俺が、お前にももの言うとも今夜限りばえ、一月十七日、宮さんゆうっと覚えとけぞ、来年の今月今夜は、貫一はどけーでこん月ば見っとじゃろかい。よかや宮さん一月ん十七日ばい。来年の今月今夜になったろば、俺が涙で必ず月ば曇らせて見するけん。月ん…月ん…曇ったろば、宮さん、貫一は何処っかでお前ば恨んで、今夜んごて泣ゃーとっばいて思うてくれ」

宮も貫一にしびちいて、泣きじゃくりながら、

「そがん悲しかこっば言わんで、ねえ貫一さん私も考えたことんあっとだけん、そりゃ腹も立たしたろうばって、ほんてご免、堪忍して、ちいっと辛抱してよ、私は貴男のことは忘れん、生涯忘れません」

「聞こごてなか、忘れんくりゃなる、なして見捨てた」

ちゅて貫一は開き直った。宮は忘れん証拠ば必ず見せるちゅて弁解したばって、貫一には納得でけんじゃった。

「金力の点で俺と富山とは較べものにならん。ばって、富山ん財産がどがしこんカんあるか、雀が米ば食うとは僅か十粒か二十粒たい。いっぺんに一俵食いきるもんでもなか。金だけで愛情のなか結婚ばすれば、いずれか後悔する。だけん、頼むけんまいっぺん分別し直ゃーてくれ」

ちゅて、貫一は溢るる涙ば振り払いながら、宮ん体ばゆさぶるばって、宮は、返事する代わりに、

「ああ、私ゃどがんしゅうろ、もし私が行たなら、貫一さんな、どがんすっと。そりば聞かせて」ちゅうだけ。

「そんなら、いよいよお前は行く気ばいね。腸ん腐ったおなご奴め」と怒鳴るや否や、貫一は足ば上げて宮が腰ば蹴って、罵った。そして、

「貴様の心変わりんため、貫一はこりから生きながら悪魔になって貴様んごたる畜生の肉

ば喰らってやる覚悟たい」ちゅて、捨て台詞ば残して立ち去った。宮は立ち上がる気力も失うて、かすかに丘さん上って行く貫一の後ろ姿ば見て呼び掛けたばって、一言「宮さん」という声がこだましただけ、後は、黒か影が掻き消すごて見えんごてなって、只、浪だけが悲しか音ば寄せ、一月十七日ん月がほの白うなって、悲しげにあたりば照りゃーた。